

時、シリア地方には珍らしからぬ事なり、暗黒は三時間續きぬ、突然聲あり、十字架より發す、曰く、「わが神、わが神、何ぞ我を遺てたまふや。」こは詩篇第廿二篇第一節の辭なり、蓋し耶蘇の愛誦せられしものならん、然れども耶蘇は其の内容を深められぬ、耶蘇は人類の罪の犠牲となりて、十字架上に釘けられしものから、人類の罪の如何に沈痛にして神に反れるかを悲しみ、自ら人類の罪を負へる如く感じ、罪ある人類の代表者として神に罰せられし如く想はれ、その心鏡曇りて神の面影を鮮かに寫さるに至りしものから、この辭を口にせられしならん、十字架の寂寥は此處に極まりぬ、耶蘇は此の辭をば希布來語にて「エリ、エリ、ラマ、サバクタニ」と言はれぬ、猶太人は其の叫聲を理解せしかども、羅馬の兵卒は其の意を解せず、エリなる一語を捕へて、エリヤと呼ぶにやと解しぬ、然れども彼等は昔の預言者なるエリヤを知れるにあらず、エリヤは猶太にて普通の名なれば、耶蘇がエリヤといふ友を呼びし位に想像せしならん、熱風面を吹いて耶蘇の唇は渴きぬ、耶蘇は「われ渴く」と言はれぬ、この時耶蘇の心は既に平靜に歸せり、靈の苦は既に癒えしかば、肉の缺乏を意識せら

れぬ、兵卒の一人は海統に醋を含ませ、之を葦の端につけ、差上げて耶蘇に飲ましむ、これよりして耶蘇の肉は益々弱りぬ、即ち大聲にて曰く、「父よ、我靈を爾の手に委ぬ、詩篇第三十一章こは凱旋の叫びなりき、耶蘇は世の罪を負ふ神の羔として、神と人とを合一する新約の血を注がれしなりき、耶蘇の事業は完成せられぬ、神に遺てられたりとの意識より、その靈を神に委ぬるまでの耶蘇が内心の經驗を思へば尊く、その間に天地は一變せしなりき、耶蘇は最後に「事了りぬ」とて首を垂れたまひぬ、耶蘇の使命は茲に完うされしなり。

耶蘇の最期の狀は周圍に立てる者の心を驚嘆せしめぬ、百人の長は神を崇めて曰く、「誠にこは義人なりき、」その他心ある者は皆深き想ひに沈みて家路に就きぬ。

この日は備節日にして且つ安息日の前日なり、故に屍を十字架の上に置くを欲せず、人々ピラトに乞うて其の屍を取除かんとす、兵卒等は其の生きんを恐れ、二人の盜賊の脛を折りしが、耶蘇の既に死せるを見て其の脛を折らざりき、一人の兵卒槍を以て耶蘇の脅を刺ぬきしに、血と水と流出せしといふ。

耶蘇の十字架をば信實なる婦人等と共に遙かに見たる人々の中にアリマタヤのヨセフあり、彼は秘かに耶蘇の弟子となれる敬虔なるイスラエル人なり、彼は集議所の宣告を如何ともする能はず、耻辱と悲痛に胸塞がりしなるが、耶蘇の屍を鄭重に埋葬せば、せめてもの心癒せと思ひ、ピラトの許しを乞うて、刑場より屍を運び出しぬ、夜間耶蘇を訪へるニコデモも亦没藥と蘆菅をまぜしもの百斤ばかりを持ち來る、而して耶蘇の屍を猶太人の葬式に従ひて、布と香にて包める後、十字架の近傍の園の中、磐をほれる痕、己が新しき墓にとて用意せる所に安置し、大なる石をもて墓の入口を塞ぎぬ、婦人等は其の憐れなる埋葬を終り、まて見届けぬ、斯かる悲惨の始終を靜かに見たるは、男の弟子にあらずして、女なりしこそ趣味深けれ。

第六章 復活

耶蘇の死は弟子達にとりて重き悩みなりき、救世主たる者如何にして斯かる最期を遂げしや、彼等の信仰は根柢より搖ぎぬ、若し耶蘇の復活なかりせば

基督教は水の泡と消えしならん、弟子達が復活の主を見たりとの事實、こは初代基督教の生命にして、又永遠に基督教の死活問題たるべし。

屍を埋葬して、三日間猶太人は墓に詣づるの慣習あり、されど弟子等は耶蘇の墓に就いて何等の考を費さず、墓に詣てんなどは想ひもよらぬ事なりき、彼等は耶蘇が何故果敢なき最期を遂げられしやとの問題に頭を悩ませり、されど忠實なるは婦人なり、マグダラのマリヤは他の婦人を伴ひて、朝なほ明けやらぬ頃、耶蘇の墓に詣て、懐かしき主を偲べり、三日目の曉のことなりき、視よ重き石は轉ばされて、屍は其處にあらざるに非ずや、マリヤはペテロとヨハネの許に走り往き、墓より主を取りし者ありといふ、ペテロとヨハネは此の報知に胸つぶれて墓に走る、ヨハネは若年なり、ペテロより疾く走りて先づ墓に至りぬ、思慮深く冥想的なるヨハネは、俯して屍を包みし布を見、如何にして屍はあらざるかと奇怪の念に我を忘れて、墓に入らんともせざりき、ペテロは後ればせに來りて先づ墓に入る、視よ首をつゝみし手巾と屍を包みし布とは何れもたしみて別に置かれぬ、屍は盗まれしや、これ第一に起れる彼等の疑惑なりき。

されどヨハネは既に主復活よみがえりしにあらざやとの想ひ微かに白みぬ。されど其れをベテロに語るべくも非ず、二人は黙して己が宿に歸り往きぬ。

マリアは尙ほも墓の側にありて泣けり。彼女は若しやと想うて再び墓を覗きぬ。この度は視よ、二人の天使白衣を纏ひて耶蘇の屍のありし處に居るにあらずや。天使はいふ「婦よ何故に泣くや。」マリアは答ふ「我主を取れる者あり、何處に置かれしを知らず。」天使はマリアの背後うしろにある者に目を向けぬ。そのためマリアは振向きぬ。一人の男そこに立てり。男は曰く「婦よ何ぞ泣くや、誰を尋ぬるや。」マリアはその園丁にんぎょならんと思ひ、「君よ彼の移されし處を知らざるや、知らば我に告げよ。」マリアよ」と耶蘇はいふ。そは充分にマリアの衷情に透徹しぬ。マリアは「師よ」と答ふ。愛する心は愛する心と感應す。如何に其の親しきことよ。マリアは耶蘇に手を觸れんとせり。耶蘇曰く「我に觸るゝ勿れ、我未だ父にのぼらざればなり。わが兄弟に往きて言へ、我は我が父即ち爾曹が父、わが神即ち爾曹が神にのぼると。マグダラのマリアは急ぎ歸りて、之を弟子達に告ぐ。衆人愕然たり。未だ俄かに信ぜず。」

同じ日の午後二人の弟子はエルサレムより七八哩隔れるエマオ村に旅せり。一人はクレオバといふ。他の一人の名は記されず。二人とも使徒にあらざ。二人は耶蘇の十字架より今朝起れる事までも談論せり。その話には愁を帯べり。耶蘇は彼等と偕に歩みしかど、彼等の眼明らかならず、それと知る能はざりき。耶蘇はいふ「爾曹歩みつゝ悲しげに談論するは何事ぞ。」クレオバは答ふ「爾はエルサレムの旅人にして此の事を知らずして過ぎしや」とて、耶蘇の受難及び其の復活の風評あるを語る。彼等は話に氣を奪はれて早くもエマオに近づきぬ。耶蘇は往き過ぎんとす。二人は彼を引留めて、既に日傾かたきて黄昏ぬ。我儕と共に留れといふ。耶蘇は留りぬ。共に食せんとする時、パンを取り神に謝して之を分たれしかば、二人の者忽ち目瞭かになりて其の耶蘇なるを認めしが、又忽ち其の目見えずなりぬ。彼等互に言ひぬ「途にて我儕と語り、且つ我儕に聖書を説明せられし時、われらの心熱せしにあらざや。」

二人は忽ちエルサレムに引返しぬ。十一人の使徒その他者に語るに實を以てせんとす。然るに彼等の語らざる前集まれる者共一聲に挨拶して「主實に

甦りてシモンに現はれたり」と云ふ。このペテロに現はれしことは保羅も亦記せり(哥林前十五ノ五)されど如何なる状態なりしか。ペテロは主との會見を秘密に保てる如し。今や二人は又已等に現はれたる事實を語りぬ。その時しも耶蘇は彼等の中に立てるを視ずや。『爾曹安かれ』と言はる。一同片唾を呑みて熟視しぬ。幽靈ならんと危ぶめり。耶蘇は彼等の駭き懼るゝ状を見て曰く、『爾曹何ぞ駭くや、何ぞ心に疑ふや。』斯く言ひて其の手と脅とを彼等に示さる。弟子たちは皆歡喜に溢れぬ。

耶蘇の現はれし時使徒の一人雙兒ユダのユダは不在なりき。彼は懷疑的の性質を有せり。他の使徒が主を見たりと云ふを信ぜずして曰く、『我もし其の手に釘の跡を見わが手を以て釘の跡にさはりわが手を以て其の脅にさはるに非ずんば信ぜず。』その後十八日十一人の使徒は密室にありて談論せり。門は閉ぢてありき。耶蘇は其の中に現はれて曰く、『爾曹安かれ。』耶蘇の此の時現はれしは、懷疑者の信仰を醒ましめなめなりき。失はれたる一匹の羊を尋ねんためなり。雙兒に向つて曰く、『爾の指を伸べて我が手を見、爾の手を伸べて我が脅にさせ、信ぜ

ざる勿れ、信ぜよ。』雙兒は懷疑の深谷より信仰の絶頂に飛上りぬ。『我主よ我神よ』と叫ぶ。耶蘇は徐かに答ふ、『爾われを見し故に信ず、見ずして信ずる者は福なり。』耶蘇は尙ほ使徒等に訓戒すべき多くの事を有しぬ。されど敵地たるエルサレムにあらざ、懐しき故郷ガリラヤに於て現はれたまひしは、樓上の室にて預言されしが如し(馬太廿六ノ二)。事實は次の如し。或る夜のこと、七人の使徒は會合しぬ。恐らくペテロの家にてありしならん。常に指導者にして激し易きペテロは突然言ひぬ、『我儕漁りに往かん。』蓋し悶々の情を癒さんとせしならん。その時集まりしはペテロの外雙兒ユダ、タルマイの子ナタナエル、ヤコブ、ヨハネ及び他の二人にてありき。彼等は皆ペテロの議に賛す。舟をテベリア湖に浮べしが、その夜は何の獲物もなし。夜はやがて明けぬ。耶蘇は岸に立ちぬ。されど弟子等は其の耶蘇なるを知らざるなり。彼等の舟は岸より約五十間餘の所にあり。耶蘇は漁夫に挨拶する商人なる如く、彼等に聲をかけて曰く、『小子等よ、魚を獲しや。』彼等は『否』と答ふ。耶蘇曰く、『網を舟の右に撒まよ。獲物あらん。』彼等は其の言ふ如くせしに、魚あまりに多くして引上ぐる能はず。茲に於て思慮に富めるヨハネ

はペテロに叫いて曰く、『これ主なり』ペテロは主なりと聴くや否や裸體なりしが衣をつけ、帯して湖に飛入りぬ。性急なるペテロが衣を纏ふだけの餘裕を有せしこそ面白けれ。他の弟子等は魚の入る網を舟もて曳きつゝ、岸に至れり。上陸せる時彼等は既に火の上にかざせる魚とパンの備へあるを見出せり。耶蘇は今獲たる魚を少し持來れと彼等に告ぐ。命を聴くや直ちに應ずるは常にペテロなり。彼は網を岸に曳來れり。網の中には大なる魚百五十三尾ありしかど、網は少しも裂かれざりき。耶蘇は彼等に來りて食せよといふ。斯くしてパンと魚とを彼等に與ふ。

食の終れる時耶蘇はペテロに向はれぬ。これ大言壯語の舌の乾く間もなく、三度主を知らずといへるペテロなり。耶蘇は彼の心を試むる必要を感ぜられぬ。曰く、『ヨナの子シモンよ、爾はこれらの者にまさりて我を尊ぶや。』尊ぶとは、ペテロの主に対する愛情を言ひ、現はす語にあらず。ペテロは答ふ、『主よ、然り、わが爾を愛するは爾の知れる如し。』耶蘇曰く、『我が羔を牧へ。』やがて二度ペテロにいふ。『ヨナの子シモンよ、我を尊ぶや。』主よ、然り、わが爾を愛することは爾自ら知れ

り。『耶蘇曰く、『我が羔を牧へ。』而して又三度ペテロにいふ。『ヨナの子シモンよ、我を愛するや。』尊ぶかは愛するかに變ぜり。ペテロは耶蘇が語を正されしを見て、尙ほ一層愛愁を増しぬ。答へて曰く、『主知らざる所なし。我爾を愛するは爾の知る如し。』

耶蘇は三度斯く問うて、ペテロの常に輕卒なる決心をなすことを誠しめて曰く、『我が羊を牧へ、誠にまことに爾に告げん。爾幼なき時自ら帯びし、心のまゝに歩きぬ。年老いては爾手を伸べて人爾をくゝり、心の欲せざる所に曳き往かん。』耶蘇の斯く言へるは、ペテロの十字架に死せんことを預言されしなり。ペテロとヨハネは使徒の最大なるもの、ペテロは耶蘇の己が事のみ誠しめられ、ヨハネに就いて一言もせられざるを怪しみ、願みてヨハネを眺め、耶蘇に問うて曰く、『主よ、この人は如何に。』耶蘇はペテロを難じて曰く、『我もし彼が我が來るまで生存するを欲せば、爾に何のかゝはりあらんや、爾は我に従へ。』他の弟子等はヨハネが耶蘇の榮光を以て再臨するまで生存すべきことを告げられしならんと想へり。されど實は耶蘇が斯かる謬想を非難せられ、忠實に従ふべ

まことをベテロに教へられしに外ならず。ヨハネの信仰は耶蘇の疑はざりし所と見ゆ。

その後耶蘇はベテロとヨハネを山に導きて祕密の會見をなされぬ。その状態は知るに由なし。その他保羅は耶蘇が五百人の兄弟に現はれ、又主の兄弟ヤコブに現はれしことを記せり(哥林前十五ノ六、七)而して又十一人の使徒に現はれて、萬國の民に福音を傳ふべきことを命じ、世の終りまで人類と共に在ることを告げられぬ。あゝ、基督の復活！それは奇蹟中の奇蹟なり。されど保羅はこれを説明して曰く、「恐なる者よ、爾が播くところの種先づ死されば生きず、又爾が播く所のものは後生ゆる所の體を播くに非ず、麥にても他の穀にても只粒のみ：死にし者の甦るも亦斯の如し。壞る者にて播かれ、壞ざる者に甦され、：血氣の體にて播かれ、靈の體に甦さるゝなり」(哥林前十五ノ四、十)神の智識の富は深し。焉ぞ人の愚かきを以て測度すべけんや。

基督終

明治四十一年十二月十五日印刷

明治四十一年十二月二日發行



發行

基督

定價金壹圓

著者 松本 赴

發行者 山縣 文夫

印刷者 青木 弘

印刷所 株式會社 秀英舎第一工場

同市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

不許複製

發行所

東京巢鴨郵便區上駒込山縣邸内
電話(長距離)下谷四百三十八番
振替貯金口座三百五十五番

内外出版協會

内外出版協會譯述	わが青年	定價金拾五錢 郵稅四錢
ウオリアマン原著	社會の要する少年	定價金拾五錢 郵稅四錢
文學士村上池洲譯述	ローズヴェルト集	定價金四拾錢 郵稅四錢
文學士藤田紫吉譯述	ローズヴェルト集	定價金四拾錢 郵稅四錢
若宮卯之助譯	座右銘	定價金四拾錢 郵稅四錢
若宮卯之助譯	座右銘	定價金四拾錢 郵稅四錢
文学士 中村麟山譯	日常行為の標準	定價金貳拾錢 郵稅二錢
中里介山編著	克己制慾の實例	定價金貳拾五錢 郵稅四錢
水島靜庵譯	日常生活の勇士	定價金貳拾五錢 郵稅四錢
オランダ大學校長原著	廿世紀の青年告	定價金拾五錢 郵稅四錢
若宮卯之助譯	歐米の新思潮	定價金四拾錢 郵稅六錢
内外出版協會譯	時勢と青年	定價金四拾錢 郵稅四錢
文学士若川正壽譯	青年の修養	定價金貳拾五錢 郵稅四錢
占部百太郎著	貧の朋友	定價金拾五錢 郵稅二錢
宮崎右夫著	立志の動機	定價金五拾錢 郵稅六錢
文学士若川保治譯	教育上の常識	定價金貳拾五錢 郵稅四錢
好本哲郎譯	教育上の常識	定價金貳拾五錢 郵稅四錢

本田増次郎譯	婦人の修養	定價金五拾錢 郵稅六錢
落合浪雄譯	婦女小訓	定價金拾錢 郵稅不取
加藤眼柳編著	女子立志編	定價金九拾錢 郵稅八錢
内外出版協會譯	人生問題叢書	定價金九拾錢 郵稅八錢
一。成功書類		
博士マリアン原著	實業に就く青年	定價金壹圓 郵稅八錢
文学士 竹村修譯	商業の模範的經營	定價金六拾錢 郵稅六錢
文学士 竹村修譯	成功の基礎	定價金貳拾五錢 郵稅四錢
博士マリアン原著	成功の基礎	定價金貳拾五錢 郵稅四錢
内外出版協會譯	真正の成功者	定價金五拾錢 郵稅六錢
博士クラフツ原著	成功の論	定價金壹圓 郵稅八錢
文学士 マリアン原著	成功の論	定價金貳拾五錢 郵稅四錢
内外出版協會譯	成功の福音	定價金拾五錢 郵稅四錢
文学士 若川保治譯	失敗の成功	定價金貳拾錢 郵稅二錢
松岡正男譯	失敗の成功	定價金貳拾錢 郵稅二錢
三。傳記書類		
ヘレン・ケラー原著	わが生涯	定價金五拾錢 郵稅六錢

チヨト原著	リンコンの人物	定價金貳拾五錢 郵稅四錢
山縣三郎譯	リンコンの人物	定價金貳拾五錢 郵稅四錢
松村 巖著	岩崎彌太郎	定價金拾五錢 郵稅不取
新公論社編纂	現代名流自傳	定價金拾五錢 郵稅四錢
渡邊修二郎編著	木内惣五郎	定價金貳拾五錢 郵稅四錢
阪井久其成著	明治崎人傳	定價金貳拾五錢 郵稅不取
松村 巖著	近藤 勇	定價金貳拾五錢 郵稅不取
四。言行録		
時上賢造編著	第一リンコン言行録	定價金拾五錢 郵稅四錢
中里介山編著	第二トルストイ言行録	定價金拾五錢 郵稅四錢
中里介山編著	第三ガリキールド言行録	定價金拾五錢 郵稅四錢
中里介山編著	第四フランクリン言行録	定價金拾五錢 郵稅四錢
中里介山編著	第五クラフトストン言行録	定價金拾五錢 郵稅四錢
中里介山編著	第六二宮尊徳言行録	定價金拾五錢 郵稅四錢
加藤信正編著	第七ローズヴェルト言行録	定價金拾五錢 郵稅四錢
百島操編著	第八ワシントン言行録	定價金拾五錢 郵稅四錢

渡邊修二郎編著	第九山鹿素行言行録	定價金拾五錢 郵稅四錢
中里介山編著	第十中江藤樹言行録	定價金拾五錢 郵稅四錢
秋山悟庵編著	第十一貝原益軒言行録	定價金拾五錢 郵稅四錢
松本赴編著	第十二ルナール言行録	定價金拾五錢 郵稅四錢
渡邊修二郎編著	第十三大石良雄言行録	定價金拾五錢 郵稅四錢
秋山悟庵編著	第十四聖徳太子言行録	定價金拾五錢 郵稅四錢
五十嵐越那編著	第十五吉田松陰言行録	定價金拾五錢 郵稅四錢
渡邊修二郎編著	第十六渡邊崋山言行録	定價金拾五錢 郵稅四錢
本田無外編著	第十七熊澤蕃山言行録	定價金拾五錢 郵稅四錢
渡邊修二郎編著	第十八新井白石言行録	定價金拾五錢 郵稅四錢
文学士藤吉喜一編著	第十九ナポレオン言行録	定價金拾五錢 郵稅四錢
松本赴編著	第二十ネルソン言行録	定價金拾五錢 郵稅四錢
室田有編著	第二十一シェリントン言行録	定價金拾五錢 郵稅四錢
大屋徳城編著	第二十二日蓮上人言行録	定價金拾五錢 郵稅四錢
田中豊松編著	第二十三ベスタロッツチ言行録	定價金拾五錢 郵稅四錢

百島操編著 第四編ゴッパルドン言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢	神齒準平編著 第五編リウイングストーン言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢	横不二夫編著 第六編伊藤仁齋言行錄 定價金貳拾五錢 郵稅四錢	木田無外編著 第七編道元禪師言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢	河面仙四郎編著 第八編クロムウエル言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢	四島玉峯編著 第九編諸葛孔明言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢	松原至文編著 第十編親鸞聖人言行錄 定價金貳拾五錢 郵稅四錢	大屋徳城編著 第一編弘法大師言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢	渡邊修二郎編著 第二編徳川光圀言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢	廣瀬勳次郎編著 第三編フレール言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢	秋山悟庵編著 第四編林子平言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢	村田厚川編著 第五編佐久間象山言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢	北島竹之助編著 第六編司馬溫公言行錄 定價金貳拾五錢 郵稅四錢	木田無外編著 第七編法然上人言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢	松原至文編著 第八編西郷隆盛言行錄 定價金貳拾五錢 郵稅四錢	廣瀬勳次郎編著 第九編ガリバルヂ言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢	松本越編著 第十編マホメット言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢	丸島敬編著 第一編本居宣長言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢	秋山悟庵編著 第二編上杉鷹山言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢	杉原三省編著 第三編高野長英言行錄 定價金貳拾五錢 郵稅四錢	勝水現泉編著 第四編大鹽平八郎言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢	大屋徳城編著 第五編傳教大師言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢	田中豐松編著 第六編シロザイ言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢	佐久間原編著 第七編シエークスピア言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢	渡邊芳雄編著 第八編ラスキン言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢	武安衛編著 第九編孟子言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢	吉川潤二郎編著 第十編ビスマルク言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢	丸島敬編著 第一編平田篤胤言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢	田中豐松編著 第二編エヂソン言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢	木田無外編著 第三編白河樂翁言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢
--------------------------------	------------------------------------	--------------------------------	-------------------------------	----------------------------------	-------------------------------	--------------------------------	-------------------------------	--------------------------------	--------------------------------	------------------------------	--------------------------------	---------------------------------	-------------------------------	--------------------------------	---------------------------------	-------------------------------	------------------------------	-------------------------------	--------------------------------	--------------------------------	-------------------------------	-------------------------------	----------------------------------	-------------------------------	----------------------------	---------------------------------	------------------------------	-------------------------------	-------------------------------

五. 家庭書類 附婦女及少年少女書類

シエルP.原著 文學士吉川秀雄譯述 家庭に於ける職分 定價金五拾錢 郵稅六錢	堺 枯川著 家庭の新風味 定價金 壹圓 郵稅四錢	堺 枯川著 家庭夜話 定價金 壹圓 郵稅四錢	ワグネル原著 文學士 竹村修譯述 家庭講話 定價金五拾錢 郵稅四錢	テーザイス原著 内外出版協會譯述 理想の母 定價金貳拾五錢 郵稅四錢	マンテガッソア原著 文學士皆川正壽譯述 良人の選定 定價金參拾五錢 郵稅四錢	スウェン女史原著 本田増次郎譯述 黒馬物語 定價金五拾錢 郵稅四錢	ウイグナー原著 日高柳軒譯述 フランダーズの犬 定價金貳拾五錢 郵稅四錢	羽仁もと子案 家庭 家計簿 定價金四拾錢 郵稅八錢	羽仁もと子案 家庭 主婦日記 定價金參拾五錢 郵稅六錢	内外出版協會案 反省日録 定價金四拾錢 郵稅六錢	文學士皆川正壽譯述 母の道 定價金貳拾錢 郵稅二錢	加藤眠柳譯述 英國士道物語 定價金參拾五錢 郵稅不取	四洞たみの譯編 婦人の感化 定價金六拾錢 郵稅六錢	稻田薄光編著 日本女鑑 定價金四拾錢 郵稅四錢	千河岸櫻所著 日本武士氣質 定價金四拾五錢 郵稅六錢	羽仁もと子著 家庭小話 定價金貳拾五錢 郵稅四錢	文學士皆川正壽譯述 如何して生活すべき 定價金參拾五錢 郵稅六錢	羽仁もと子編 如何に家計を整理すべき 定價金參拾五錢 郵稅四錢	羽仁もと子著 家庭問題 定價金參拾五錢 郵稅四錢	羽仁もと子著 家庭教育の實驗 定價金參拾五錢 郵稅四錢	醫學博士加藤照磨譯述 育兒法 定價金六拾錢 郵稅八錢	博士ウチカキ原著 醫學士 田村良策譯述 衛生美容術 定價金五拾錢 郵稅四錢	伊藤カク原著 ストロカク原著 西洋獨占ひ 定價金貳拾五錢 郵稅四錢	篠田鏡造著 幕末百話 定價金四拾錢 郵稅四錢	宮崎三味編 はなしの仙郷 定價金貳拾錢 郵稅二錢	波多野烏峰編 小説愛の力 定價金貳拾錢 郵稅二錢	少年團編 愛の力 定價金貳拾錢 郵稅四錢
--	--------------------------	------------------------	-----------------------------------	------------------------------------	--	-----------------------------------	--------------------------------------	---------------------------	-----------------------------	--------------------------	---------------------------	----------------------------	---------------------------	-------------------------	----------------------------	--------------------------	----------------------------------	---------------------------------	--------------------------	-----------------------------	----------------------------	---------------------------------------	-----------------------------------	------------------------	--------------------------	--------------------------	----------------------

朝夷孤舟編 ちるゑのくら 定價金貳拾五錢 郵稅四錢	桑田常成原著 儉約のすゝめ 定價金貳拾錢 郵稅二錢	成澤金兵衛編 家庭遊戯全書 定價金參拾錢 郵稅四錢	大藏大臣認許 新案 國旗合せ 定價金貳拾錢 郵稅二錢	内外出版協會考案 新案 家族合せ 定價金貳拾錢 郵稅二錢	内外出版協會考案 新案 室內ベニスボール 定價金貳拾錢 郵稅二錢	百島冷泉編 通俗文庫 天路歷程 定價金貳拾錢 郵稅二錢	百島冷泉編 通俗文庫 奴隸トム 定價金貳拾錢 郵稅二錢	百島冷泉編 通俗文庫 聖書物語 定價金貳拾錢 郵稅二錢	百島冷泉編 通俗文庫 赤靴物語 定價金貳拾錢 郵稅二錢	百島冷泉編 通俗文庫 二人巡禮 定價金貳拾錢 郵稅二錢	百島冷泉編 通俗文庫 漂流記 定價金貳拾錢 郵稅四錢	百島冷泉編 通俗文庫 イソップ物語 定價金貳拾錢 郵稅二錢	高浪虛子著 俳句入門 定價金貳拾五錢 郵稅四錢	
寒川風骨著 歲事記例句選 定價金五拾錢 郵稅四錢	佐藤紅綠著 俳句小史 定價金參拾錢 郵稅四錢	山田三子編 蕪村俳句全集 定價金貳拾五錢 郵稅四錢	大塚甲山編 一茶俳句全集 定價金貳拾五錢 郵稅四錢	熊谷無滯編 天明俳句集 定價金貳拾五錢 郵稅四錢	河俣雪峰編 名家句集 定價金貳拾五錢 郵稅四錢	大塚甲山編 明治新俳句集 定價金貳拾五錢 郵稅四錢	渡邊水巴編 新俳句選 定價金貳拾錢 郵稅二錢	高柴象外編 俳句語彙 定價金貳拾錢 郵稅二錢	大塚甲山編 芭蕉俳句全集 定價金貳拾五錢 郵稅四錢	熊谷無滯編 許六俳句集 定價金貳拾錢 郵稅二錢	大塚甲山編 元祿十家俳句集 定價金貳拾五錢 郵稅四錢	永井孤秋編 女流俳家句集 定價金貳拾五錢 郵稅四錢	佐藤紅綠編 滑稽俳句集 定價金貳拾五錢 郵稅四錢	文學士沼波環音編 古新俳諧奇調集 定價金貳拾五錢 郵稅四錢

六. 俳諧書類 附川柳狂歌書類

沼波理首共編 古今名流俳句談 定價金參拾錢 郵稅四錢

内藤鳴鶴選評 俳句選 定價金參拾錢 郵稅四錢

花岡百樹編 川柳類纂 定價金貳拾五錢 郵稅四錢

藤波樂齋編 新川柳名句選 定價金貳拾錢 郵稅二錢

藤波樂齋編 新柳樽 定價金貳拾錢 郵稅二錢

高橋太華編 類題狂歌大全 定價金參拾錢 郵稅四錢

七。語學書類

東京外國語學校教授 英語の手紙 定價金貳拾五錢 郵稅四錢

渡邊修二郎著 英語獨案内 定價金四拾錢 郵稅四錢

渡邊修二郎著 英和日用會話 定價金四拾錢 郵稅四錢

渡邊修二郎著 英和書翰文例 定價金參拾五錢 郵稅四錢

渡邊修二郎著 英語作文便覽 定價金五拾錢 郵稅六錢

四ツク合著 新實用英語會話 定價金參拾錢 郵稅二錢

ハイム一原著 英語自修論 定價金貳拾五錢 郵稅四錢

山縣五十雄編註 英文學研究 定價金壹圓 郵稅八錢

高等師範學校教授 英文詳解 定價金參拾錢 郵稅二錢

本田増次郎註釋 英文逸語獨案内 定價金五拾錢 郵稅四錢

渡邊修二郎著 獨逸語獨案内 定價金五拾錢 郵稅六錢

トサトウ英譯 JAPAN 1853-1894 (英文開國史談) 定價金五拾錢 郵稅四錢

波邊修二郎校註 邦開國史談 (別冊英) 定價金五拾錢 郵稅四錢

トサトウ英譯 HISTORY OF JAPAN (英文日本近世史略) 定價金五拾錢 郵稅四錢

高等師範學校教授 英雄論詳解 定價金貳拾五錢 郵稅二錢

本田増次郎註釋 イル英雄論詳解 定價金貳拾五錢 郵稅二錢

若松暖子譯 セーラクル物語 定價金參拾錢 郵稅四錢

文學士皆川正壽編註 希臘勇士譚 定價金參拾錢 郵稅四錢

文學士小野保三譯註 英米名家詩抄 定價金六拾錢 郵稅不用

文學士小原要造譯註 英米名家詩抄 定價金六拾錢 郵稅不用

八。文學書類 附作詩作文書類

ワグネル原著 ワグネル物語 定價金六拾錢 郵稅六錢

ツルゲネーフ原作 其の前夜 定價金七拾錢 郵稅六錢

相馬御風譯 血の涙 定價金參拾錢 郵稅四錢

博士リリアル原著 山田美妙譯 血の涙 定價金參拾錢 郵稅四錢

吉江孤雁譯 ツルゲーネフ短篇集 定價金五拾錢 郵稅六錢

百島冷泉譯 トルスストイ短篇集 定價金五拾錢 郵稅四錢

宮崎三味編著 **中學文範** 定價金五拾錢 郵稅四錢

寒川鼠骨編著 **寫生文** 定價金四拾錢 郵稅四錢

寒川鼠骨編著 **日記文** 定價金四拾錢 郵稅四錢

堺 枯川著 百文 **普通文** 定價金貳拾五錢 郵稅二錢

山田美妙著 百文 **文例** 定價金五拾錢 郵稅四錢

五十嵐起耶編著 **女子文範** 定價金貳拾五錢 郵稅四錢

少年岡田編著 **詩學捷徑** 定價金貳拾錢 郵稅不取

九。中等教科書類 (文部省檢定済)

文學士 佐々政一編 **日本文學史要** 定價金五拾錢 郵稅六錢

第三高等學校教授 文學士 林森太郎編 **國語讀本** 定價金五拾錢 郵稅八錢

卷一 定價金貳拾錢 郵稅四錢
卷二 定價金貳拾錢 郵稅四錢
卷三 定價金貳拾錢 郵稅四錢
卷四 定價金貳拾錢 郵稅四錢

簡野道明編 **初等漢文讀本** 定價金八拾錢 郵稅八錢

文學士 男原六著 **簡易西洋史** 定價金七拾錢 郵稅八錢

第一高等學校教授 文學士 杉崎介著 **日本小語典** 定價金五拾錢 郵稅四錢

一〇。雜書

ホルトキノ原著 文學士 生田弘治譯 **讀書の趣味** 定價金八拾錢 郵稅八錢

ノックス原著 若宮卯之助譯 **東洋文明論** 定價金四拾錢 郵稅四錢

內外出版協會編著 **袖珍百科全書** 定價金壹圓 郵稅貳角八錢

工學士 後藤一耶著 **寫真術全書** 定價金五拾錢 郵稅六錢

松居松葉著 **自轉車全書** 定價金五拾錢 郵稅四錢

關根默庵著 **演劇大全** 定價金六拾錢 郵稅六錢

渡邊修二耶著 **各國分類年表** 定價金八拾錢 郵稅六錢

大下藤次耶著 **水彩畫階梯** 定價金五拾錢 郵稅四錢

渡邊修二耶著 必携 **百科節用** 定價金貳拾錢 郵稅二錢

陸軍歩兵中尉功四級 工學士 市川紀元二著 **應用骨相學** 定價金五拾錢 郵稅四錢

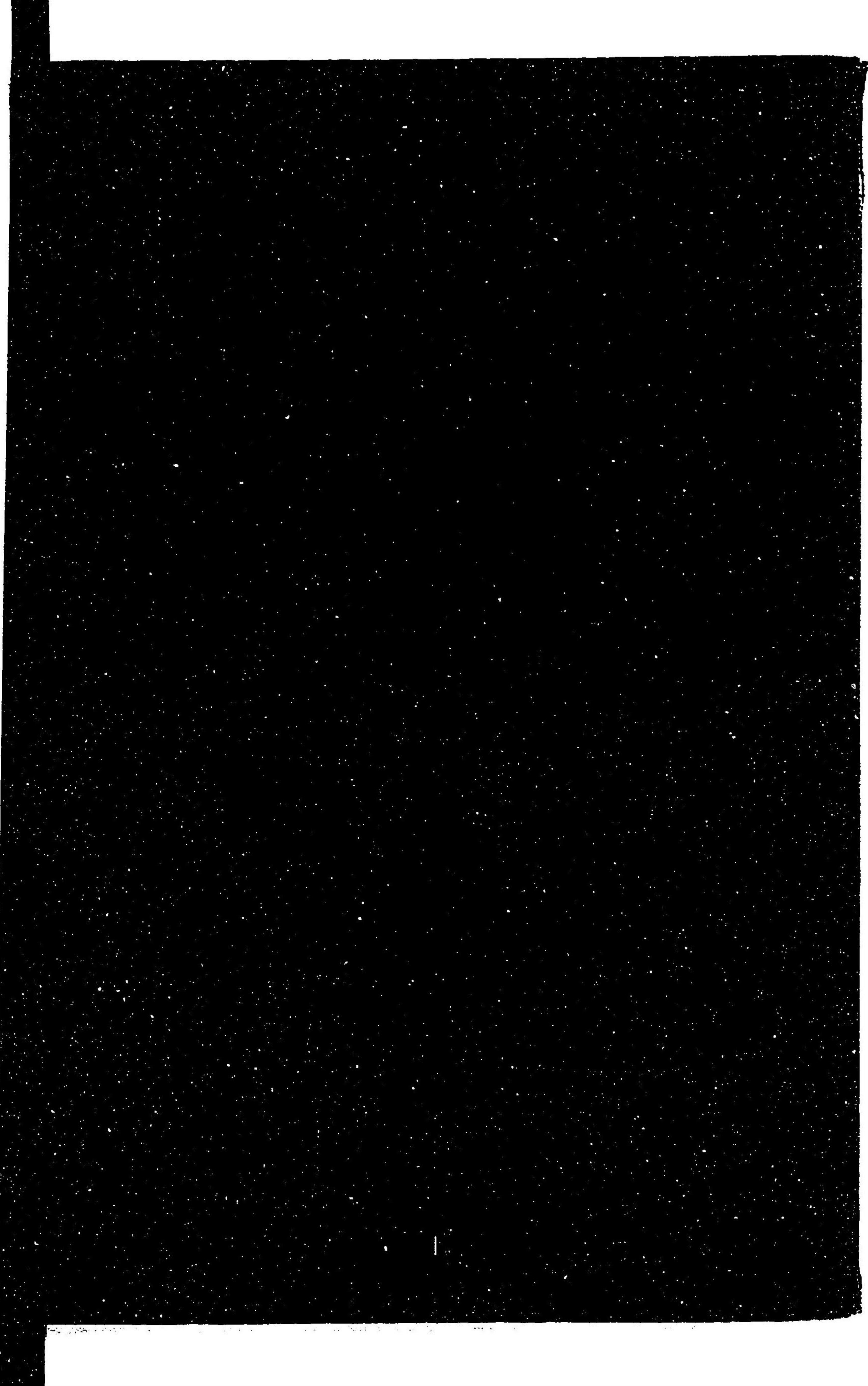
北澤寅之助合著 新 **渡米案内** 定價金五拾錢 郵稅四錢

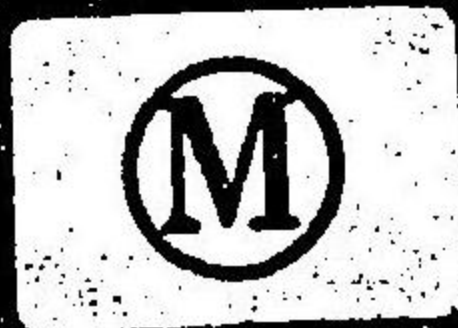
成澤金兵衛合著 新 **全國學校案内** 定價金五拾錢 郵稅六錢

內外出版協會編著 **就業自活案内** 定價金五拾錢 郵稅四錢

內外出版協會編著 **女子の新職業** 定價金五拾錢 郵稅四錢

324
107





020418-000-4

324-107

基督

松本 赴/編著

図版

M41

ABI-0227



